

保育者養成校のピアノ演奏指導における
「楽曲イメージ奏法」の効果に関する研究

西濱 由 有

愛知東邦大学

保育者養成校のピアノ演奏指導における 「楽曲イメージ奏法」の効果に関する研究

西濱 由 有

目 次

- I はじめに
- II 先行研究との対比による本研究の意義
 - 1 「楽曲イメージ奏法」
 - 2 イメージとピアノに関する研究
- III 研究方法
- IV 研究の結果
 - 1 学生のイメージ楽譜とイメージ画
 - 2 音楽的特徴に対する思考の変化
- V 「楽曲イメージ奏法」の効果に関する考察
 - 1 楽曲のイメージが豊かになる
 - 2 音楽的な表現意欲の向上
 - 3 視覚的な楽曲分析の効果
- VI おわりに

I はじめに

本研究の目的は保育者養成校の学生のピアノ曲における楽曲理解、及び演奏表現の向上に対する「楽曲イメージ奏法」の効果について明らかにする事である。幼児は保育者の表現する音楽を聴き音楽表現を行う。そのため保育者には音楽を表現するための技能と、豊かな音楽的表現力が求められる。「幼稚園教育要領」によると領域「表現」のねらいの中には、「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ事」や、「感じた事を自分なりに表現する事、生活の中でイメージを豊かにして様々な表現を楽しむ事」が挙げられている。またその内容として「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、楽しんだりする事」、また「様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう事」などが挙げられている。

そこで幼児と共に行う様々な音楽活動の中でも、大きな影響を与えるであろうと考えられるピアノ演奏を、より音楽性豊かに表現できる様に学習方法を考えて実践しようと考えた。保育者養成校である本学では音楽に関する科目として1年次において「幼児の音楽」の授業がある。ここでは主にピアノの個人レッスンと各クラス内での発表会を実施しており、過去に行われた発表会において学生は『バイエル』『ブルクミュラー』や『ソナチネ』その他の曲を演奏した。発表会

では、ピアノ経験があり必死に難曲に取り組んでいる学生や、初心者で緊張しながらも懸命に初めてのピアノ演奏の発表に取り組んでいる学生など様々であった。その中でも指はスラスラと動いているが強弱やアーティキュレーションが全く付いていない事、テンポ通りに弾いているが表現力に乏しい事が特に気になった。

奥は「音楽表現には、恋愛、宗教、風景、世の中への怒りなど、文学や絵画での表現と多くの共通点があります。何を表現したいのか、という演奏者の具体的な思いがない限り、どんなにタッチや音色を美しく磨いても、その向こうには何も見えません。単に完璧な演奏、という弾き方ほど聴き手にとってつまらないものはありません [1]」と述べている。手はスラスラ動いて完璧に弾けるだけではなく、その向こうに何かが見える演奏を目指したい。保育士や幼稚園教諭の採用試験の際にピアノ実技や弾き歌いの課題が出題される事がほとんどだが、その際に課題となる事が多いバイエル後半程度までは終わらなければならないといったプレッシャーにより、多くの学生の音楽的な表現が乏しいものになってしまっている。そして何よりも、学生のピアノ演奏に対する興味が非常に希薄であるという現実に直面して、このまま単調なレッスンをしているはいけなく強く感じた。

山岸は「頭と指先とは本来直結しているものなので、音への欲求、正しい音のイメージさえあれば、指先は、自然に正しく使えてくるものなのです。しかしそのようにならないのはほとんどの人が、弾くことにとらわれて音楽を忘れたり、メカニックの訓練が先行するため、頭が正しくはたらかなくなるので、弾けなくなってしまうのです [2]」と音への欲求と正しいイメージの必要性を示しているが、これは本学の学生のピアノ演奏において特に不足している点である。

また雁部は音楽的イメージと演奏テクニックについて「すべてに先立つものは、何をどの様に表現したいかという音楽的イメージです。これがなければ楽器を演奏する意味がありません。音楽的イメージを豊かにするためには、何よりも楽譜を深く読むことが大切ですが、これは単なる情報として正確に読むということではなく、その音楽が内包する様々な音表情を感じとりながら作品全体を構成することです [3]」と言っている。保育者を目指しているからピアノを演奏しなければいけないという意識を超えて、この曲をこんなイメージで演奏したいと学生自身が考えて、自発的に表現する姿を目指したい。

そして井上は「良い演奏というのは「指」(テクニック)が先行しているわけではなくて、「イメージ」が先行しているものだと思います。つまり、「こういうふうに弾きたい」という意志—その曲に対する、曲全体の大きなプランから、瞬間瞬間の(今、弾こうとしている)部分までの構想—が、まず先にある。頭で全体のイメージを描き(=考え)、それを音にする(=弾く)、そして、イメージしたものに近いかどうかを聴く。この流れが、始まってから終わるまで、ずっと続いていく。どれかひとつでも欠けると、もう演奏にならない [4]」と説いており、目の前の音だけにとらわれずに全体のプランを頭の中で描いて演奏する事の大切さを示している。

ピアノ曲を演奏するにあたってただ単に音を並べてしまい表現するという事を忘れてしまうのでは無く、頭の中で具体的にたくさんの世界観や物語をイメージして、自分の内面を表現出来る

演奏をする事は学生にとって大きな感動と喜びを与えるのみならず、保育者としての音楽指導に多大な影響を生み出すだろうと考えられる。

保育者自身が音楽のイメージを心に描き表現豊かなピアノ演奏をすれば、子ども達もきっとそれを体で感じて憧れを持ち、生き生きと表現するきっかけとなるだろう。そこで本研究では「楽曲イメージ奏法」を実践して保育者養成校の学生のピアノ曲における楽曲理解、及び演奏表現の向上に対してどんな効果があるのかを明らかにしたい。

Ⅱ 先行研究との対比による本研究の意義

1 「楽曲イメージ奏法」

「楽曲イメージ奏法」とはピアニスト武本京子が自ら演奏会や講座で実践し、教育現場で積み重ねてきたピアノ演奏法、及び音楽鑑賞法である。武本は「楽曲を分析して、それを言葉、色、絵、文字等で表現し、把握すること、それらのイメージから誘導された奏法を使って楽譜から導き出されたイメージを表現することです。また、児童教育に対しては勿論のこと、大人の方にも人生経験が多い人ほど深い理解が可能なわけですから、より面白い演奏が可能になり、音楽が楽しめると思います [5]」と述べている。「楽曲イメージ奏法」について概要と手順をまとめたものは以下の通りである ([5] のpp. 11-15.)。

(1) 概要

作曲家とその曲が作曲された状況と特徴を調べる。そして自分がその楽曲から受ける漠然としたイメージを考えて、そのイメージを言葉や形容詞で表す。例えば嬉しい、悲しい、力強い等。そしてこれらのイメージは人生経験や年齢の違いなどによっても変化するものである。そしてそのイメージを基に場面、物語等を設定して、簡単に文章化して、曲のイメージがはっきりしたら各フレーズが曲全体を構成する上で、どんな役割を持っているのかを意味付けていく。また、フレーズごとに心情を表わす部分なのか、情景描写の部分にあたるか、などを考えておく。そしてこの時に、イメージを豊かにより強固にするために話の登場人物や時代、その話における状況なども設定する。細かい設定ができれば、次にフレーズごとに自分のイメージを具体化させて、ハーモニー、旋律、潜在的な動機に具体的な物語を考える。その方法として、まず旋律から抽象的なイメージを思い起こした文章例を挙げていく。この様にして出来上がった各フレーズの文章を、その曲のイメージに合う様に、ひとつの物語としてまとめ上げていく。そして自分がイメージした物語と、雰囲気を感じさせる色を、自分に喚起させる色で楽譜に着色する。こうした作業は膨大な時間を要するものであるが、自分だけのオリジナルの楽譜を完成させて、楽しんで演奏できたという経験を持たせた者は驚くべき進化を遂げたという。

(2) 手順

- ① 導入…作曲家とその曲が作曲された状況と特徴を調べる。

作曲家の生きた時代、人間性、生き方、環境などを調べる事を通して、その作曲家の人間性やその曲に込められた想いなどが見えてくる。

② 言語化…漠然としたイメージを言葉に表す。

初めてその曲に出会ったときのイメージを形容詞などで表す。(例：悲しい、明るい、勇ましい、可愛いなど)。そしてなぜその様なイメージを受けるのかを、和音、リズム、メロディーなどあらゆる角度から考察する。

③ 具体化…全体の構成の把握をして、細かなフレーズの意味付けや設定を行う。その曲について自分が持つイメージを文章にして物語全体を創作する。登場人物、場面設定、心情の変化など曲全体の物語を考えて完成させる。

④ 着色…イメージに合う色を楽譜に薄く着色する。様々な色が持つイメージを自分なりに感じ取って曲の場面に合う色を選び着色する。(例：柔らかい→桃色、情熱的→赤、清涼感→水色など)。

⑤ タッチの誘導…物語のイメージに合うタッチを導く。なぜその様なイメージを受けるのかを、和音、リズム、メロディーなどあらゆる角度から考察する。自分が持っているイメージに近づく為にはどんな指の使い方、強弱、アーティキュレーションで演奏するのが効果的かを考えて演奏する。またレッスンの中で各場面に合わせた効果的な奏法で演奏できる様に改善していく。

そしてこの奏法を実践すると、以下の3つの効果が期待出来ると考えられる ([5] の pp. 7-9.)。

(3) 効果

① 無意味な音がなくなる

楽譜に自分のイメージした色を色鉛筆で着色していく。普段ただ何となく音を追って練習しているだけでは見落としがちであるひとつひとつの「音」の意味に着目する事ができる。意識しないで演奏していると気が付かない隠れた旋律や、フレーズの重なりなどを発見する事ができる。また立体的に音楽を捉えて、すべての音に色付けをするので、意味付けの無い音が無くなる。

② 全体の構成を把握できる

音楽に物語を付ける。作曲家の意図を探りながら、自分が感情移入しやすい状況設定と登場人物を設定して物語を展開する事により、全体を把握して自分の思いを込めた演奏ができる。

③ 自己の確立が可能になる

音楽を演奏するという事は自分自身の心を表現する事である。楽譜の奥底に隠された人間が言葉で言えない微妙な感情、魂の爆発や自然や神への祈りなど、様々な想いを心で感じて、また意見を言える演奏をする事が可能である。ここで述べる自己の確立とは自分のアイデンティティーを表現の中に表すという意味である。

M・クッチェリーは「音楽経験の際に起こっていることについて人が考えたり話したりする時、どのような種類の精神メカニズムが感覚中枢で活性化されているのであろうか。音楽は、聴覚データの単純な受容から、感受性の鋭い被験者でさえほとんど表現できない様な印象にまでいたるまでのさまざまな純粋な知覚的スペクトルをもたらすことができる。この印象は、表現することができないほど非常に強く心を喚起し、圧倒的で、超自然である [6]」と説いており、音楽とは言葉にしがたい程の圧倒的な印象を心に喚起するものである事を示している。

人は同じ楽曲を聴いても感じる事や捉え方はそれぞれ違うものであり、同じ人間であっても人は日々変化していく。演奏する自分自身が音楽から受けたイメージを自分らしく表現する為に、ピアノレッスンにおいて音色を使い分ける技術を磨き、心と体と技術をひとつにさせるのが「楽曲イメージ奏法」である。筆者は武本が実践を積み重ねてきたこの「楽曲イメージ奏法」を学生自身が興味を持って取り組み、実践する事によって彼らのピアノ演奏が従来のような受動的なものでは無く自発的に表現する意欲的なものとなって、様々な音楽的特徴を意識して演奏する事に繋がるのかどうかを明らかにしたい。

2 ピアノとイメージに関する研究

古市は身体表現における即興的な伴奏音楽の作曲について次の様に述べている。「まず、動きのイメージを楽譜の上に置き換える作業を行う。例えば、ウサギがとぶ動きでは、音符は五線の上をとばす。演奏の場合でも、ピアノの鍵盤をオクターブ以上にとびはねて、手を動かし演奏すると、とぶ感じの音楽になる。波が揺れている場合は、楽譜の音符は揺れを描けばよく、ピアノの演奏においては波のように指先を細かく動かしてトリルする [7]」。そしてその作曲手順として「伴奏音楽を作曲する場合①動きと同じ視覚的イメージを楽譜の上に再現すること。②表したものを視覚的にイメージしそれをそのまま楽譜の上に並べることが、伴奏を身体表現活動にぴったりしたものにする。このことを伴奏者が意識することは身体表現を行う際に、保護者にとって重要な意味がある ([7] の p. 177.)」と示している。楽曲に合う物語を考えて楽譜に着色をしてイメージを膨らませる「楽曲イメージ奏法」の実践が視覚的イメージを創造する事による演奏表現の向上を計れるのかをどうか明らかにしたい。

夏目は子どものピアノ演奏に「動物イメージ」を活用して『動物イメージ奏法』と名付けた。そしてメロディーから感じられる動物をイメージしてその奏法を見つけて、曲想豊かな演奏が出来るようになったかを検討した結果『動物イメージ奏法』について以下の様に述べている。「子どものピアノ学習と演奏に大変効果的である。しかし、曲の部分ごとにイメージをつけ、曲全体の構成をするには、いろいろなイメージが持てるようになることが必要である [8]」。本研究では子どもではなく保育者養成校の学生が、この様な動物のイメージも含めて様々なイメージを創造して演奏する事によって、どのような音楽的要素を意識する効果があるのかを明らかにしたい。

加藤、伊達は他学生が演奏するピアノ曲を聴取して、自分が感じた印象をイメージ画で表すイメージ描写学習を行った結果「学生が作品に対してイメージを持つことに対して積極的に考え、音楽の持つ多様性や奥深さを感じていることがわかる [9]」と観察しており、その学習を経た

上で学習曲に対する場面の変化毎のイメージを考えさせて、そのイメージ通りに演奏するという自己思考によるピアノ表現学習を行った結果「学生は自分がイメージしたことや感じたことが作品のどの様な要素、あるいはどの様な特徴によるものなのかを考え、それを表現に繋げようとしているのである（[12] のp. 106.）」と述べている。これらの事から学生が自ら思考して表現する為にイメージを考えた上で演奏することによってそれが表現へと繋がり、イメージ描写学習によって音楽の多様性を感じられる事が分かる。本研究では保育者養成校の学生がピアノ演奏において、楽曲からイメージした物語を創ってそれに合う色で楽譜に着色する事や、楽曲の物語全体をイメージする絵を描いてから演奏する事によって、音楽的な特徴に対してどの様な意識の変化があるのかを明らかにしたい。そして音楽的に少し自信の無い学生にとっても演奏技術のみにとらわれるのではなく、創造して表現する楽しさを感じながら学習できる機会となるのかを明らかにしたい。

Ⅲ 研究方法

研究期間

2011年後期「幼児の音楽」の授業15回分

研究対象

人間学部子ども発達学科1年生14名

研究概要

武本が提唱する「楽曲イメージ奏法」を元にしてそのまま用いて学習するとなると膨大な時間と労力を費やす事となって、授業内の個人レッスンや個人練習の時間に曲を仕上げる事が困難であるため、筆者は学生が取り組みやすい内容に改善して実践する事とした。学生にとって身近な題材を取り上げて、そのイメージに合う色を色鉛筆で楽譜に着色して、楽曲をイメージした物語を創作する。そして5、10、15回目の授業におけるクラス内発表会で演奏する。前述した様に保育者養成校におけるピアノレッスンとして、より意味深い実践を目指して音楽と造形の繋がりを深める為に、楽譜を着色した後にイメージするイラストや模様を加える事と、15回目の授業での発表会では楽曲全体をイメージする絵画を八つ切り画用紙に描く事を課題にする。

研究手順

- ① 導入…作曲家の意図をとらえながら、漠然としたイメージを言葉にして楽譜に書き込む。
(例：嬉しい、悲しい、爽やか、恐ろしい、登場人物、動物、季節感など)
- ② 着色…イメージに合う色を選んで、場面や理想の音色に合わせて色鉛筆で薄く着色する。
(例：涼しげ→水色、情熱的→赤、嬉しい→ピンク色など)
- ③ 言語化…主人公、季節、場所、時間などを設定して、大まかに物語を構成していく。
(例：ポエムの様な形式または起承転結のある物語)
- ④ 具体化…曲全体の構成やクライマックスを把握した上で、細かなフレーズの意味付けや登場人物の設定を行って物語を完成させる。
(例：登場人物の特徴、場面設定、心情の変化など)

- ⑤ イラスト化…物語のイメージに合うイラストや模様を楽譜に描いて、楽譜を見てすぐに物語の世界感が理解出来るようにする。

(例：模様、記号、登場する動物、植物、風景など)

- ⑥ レッスン…自分が持っているイメージに近づく為にはどんな指の使い方、強弱、アーティキュレーションで演奏するのが効果的かを考えて演奏する。またレッスンの中で奏法を改善していく。イメージに合う演奏により近づける為に授業内で個人レッスンをする。なぜそのようなイメージを受けるのかを和音、リズム、メロディーなどあらゆる角度から考察する。
- ⑦ まとめ…5、10、15回目の授業でクラス内発表会をする。その際自分のイメージする物語をみんなに伝えてから演奏し、互いに自由記述により評価し合う。なお15回目の発表では発表曲のイメージに合う絵画を八つ切り画用紙に描いてそれも発表する事とする。

学生が提出したイメージ楽譜を音楽的特徴や演奏の工夫と共に例示して、イメージ画は音楽的特徴と着色の工夫と共に例示して考察する。また学習前と、5回目、10回目、15回目のクラス内発表会終了時に質問紙によって20項目の音楽的特徴を「意識した」または「意識していない」のどちらかに○を付けてもらい、演奏時にどれだけ意識できたのかを集計してその推移をまとめた結果を元に考察する。また、「楽曲イメージ奏法」を実践してみてどんな変化を感じたかを同じ質問紙の自由記述の欄に記入してもらい、それを元に考察する。なお、以下に掲載するイメージ楽譜やイメージ画及び質問紙の回答は、今回の研究方法を説明して学生の承諾を得た上で掲載するものである。

IV 研究の結果

1 学生のイメージ楽譜とイメージ画

ここに学生が学習した作品について描いたイメージ楽譜の譜例とイメージ画を挙げて、作品から受けたイメージや創造した物語、イメージした色やイラストを色鉛筆で着色したものを例示する。また譜例については様々な個性のある作品の中から、①風景や情景②キャラクター性③心情の変化をテーマに表現した3つの作品を取り上げる事とする。

- ① 風景や情景を繊細に描写した事例として、譜例1～5のブルクミュラー作曲『25の練習曲』より「すなおな心」を音楽的特徴と、レッスン時に指導した演奏の工夫と共に例示する。
- ② 次に自然や動物の様子を生き生きと表現した事例として譜例6～11のクレメンティ作曲『ソナチネ』作品36-3より1楽章の前半部分（1小節目～26小節目）を音楽的特徴と、レッスン時に指導した演奏の工夫と共に例示する。
- ③ 主人公の心情の変化を色彩豊かに表現した事例として、譜例12～20のランゲ作曲『花の歌』冒頭2小節と中間部分の物語のあらすじ、後半部分（27小節目～59小節目）を音楽的特徴と着色の工夫と共に例示する。
- ④ 絵図1はランゲ作曲『花の歌』のイメージ画であり、曲全体の物語の流れと共に例示する。

① ブルクミュラー作曲 『25の練習曲』より「すなおな心」

譜例 1

音楽的特徴…左手は全音符の和音が静かに続く。右手はスラーが付いて同じ音形の繰り返し。
演奏の工夫…左手は波を感じながら鍵盤に音がしみ込む様に優しい音色で。右手はレガートで流れる様に、ハーモニーの違いをよく感じて。右手の上行形は次の小節へ向かう様に。

譜例 2

音楽的特徴…クレッシェンドとディミヌエンド。一つのフレーズが終わり、また新たに始まる。
演奏の工夫…クレッシェンド部分の右手は音の高さは下がっても、次へ向かってエネルギーを感じて。フレーズの終わりは優しく音を終結させて、休符を意識する。その後また新たな気持ちで。

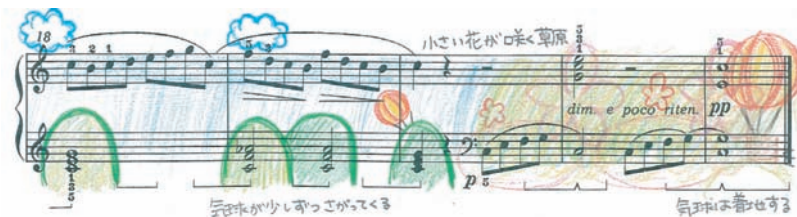
譜例 3

音楽的特徴…左手にクレッシェンドとディミヌエンド。短七和音から減七和音への響きを感じて。
演奏の工夫…強弱が付いた左手の部分は右手のメロディーに呼応する様に表現する。13小節目は和音の変化をよく感じて、解決する和音（太陽のマークの方向）へ向かって盛り上げて行く。

譜例 4

音楽的特徴…ハ長調の主和音に解決。15小節目で属七和音になり1、2カッポで主和音へ解決。
演奏の工夫…前の小節の減七和音から主和音の解決を強く感じて安心感を持って歌う様に。15小節目の属七和音を少しためてから、ひとつの山を超えるように次の主和音への解決をする。

譜例 5



音楽的特徴…ずっと主和音が静かに続く。最後はディミヌエンドがあってピアノシモで終わる。演奏の工夫…山を越えてきた気球がゆっくり降りて来て、静かに物語が終結する様に丁寧なタッチで表現する。最後の和音は決して強くならないで、静かにゆっくりと鍵盤に置く様に弾く。

以上から、学生はメロディーラインを美しい自然の中で冒険する気球に例えて、強弱を自然の情景の変化に例えるなどの工夫をして楽曲を表現しようとしている事が分かる。発表会終了時の質問紙の自由記述によると学生は「色を付けることによって強弱が分かり易くなった」「表現力が豊かになった」と述べている。これらの結果により学生は、楽曲の音楽的特徴を的確に捉えてそれを自分がイメージする美しい情景に還元させて表現している事が分かる。

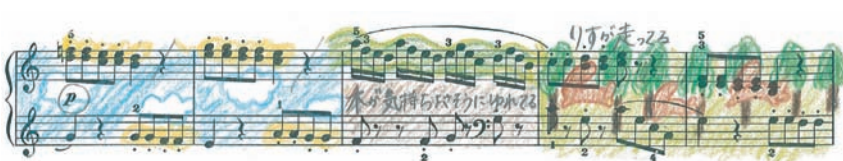
② クレメンティ作曲 『ソナチネ』 作品36-3

譜例 6



音楽的特徴…Spiritoso (元気に)。付点四分音符の高音で始まり、上行形やスタッカートが多い。演奏の工夫…爽やかな光が差し込むように、右手の主題の始まりは肩の力を抜いて遠くへ響かせる。スタッカート部分は短く生き生きと弾力をもって。上行形のオクターブは滑らかに演奏する。

譜例 7



音楽的特徴…右手のメロディーを左手が追いかけている。十六分音符の細かいメロディー。演奏の工夫…休符を大切に感じて、左右のメロディーの重なりを効果的に表現する。十六分音符は指を上げずに鍵盤に近い所で美しく滑らかに、粒を揃えて演奏する。

譜例 8

発表会がもうすぐ始まるよ! トキトキ ワクワク 女の子が踊る

cresc. ① *f* *p dolce* ②

おわる.

音楽的特徴…3小節間の長いクレッシェンド。ここで初めてドルチェ（甘く、優しく）の表記。
演奏の工夫…ドキドキをより効果的に表現する為に、クレッシェンドの始まりは弱く。四分休符を充分に感じて、次の新しい場面に切り替える。十六分音符の下行形やスタッカートを優雅に。

譜例 9

りやきつね、ねこが集まると、 こりが楽しくに飛んでは

cresc.

音楽的特徴…右手は十六分音符の下行形、上行形の繰り返し。左手は分散和音に変化していく。
演奏の工夫…右手の十六分音符は優雅に輝くような音色で。上行形は滑らかに高い音へ向かって勢い良く演奏する。左手の和音進行はハーモニーが変化しているので、よく感じて演奏する。

譜例10

りやきつね、ねこが集まると、 こりが楽しくに飛んでは

cresc.

音楽的特徴…右手は2小節間同じリズムで少しずつ下行している。休符が表拍に登場する。
演奏の工夫…高音から始まりだんだん低音に下がる部分は、遠くからだんだん近くへ動物が集まるイメージでスタッカートを生き生き表現する。裏拍のスタッカートは小鳥の鳴き声の様に。

譜例11

みんなが拍手している 卒業か? …?

cresc. *p* *cresc.*

音楽的特徴…クレッシェンドが2回あって、前半は2小節スラーで、後半はスタッカートが多い。
演奏の工夫…前の小節から引き続き弱音で弾き始めて、トリルを盛り上げて歌う様に。もう一度小さい音から弾き今度はスタッカートで元気よく、最後の主和音の解決へ向けて盛り上げる。

以上から、学生は明るく生き生きとした楽曲の雰囲気に合わせて動物が登場したり、ドルチェのメロディーは優雅な踊りに例えて、よりイメージしやすい様に工夫している。発表会終了時の質問紙の自由記述によると学生は「ストーリーを考える事で、イメージしやすくなるから楽しい」と述べている。また強弱の変化は色の濃淡で表現しており、フレーズ毎に色合いを変化させている。楽譜から読み取った音楽的特徴をより視覚的に理解し易い色や形で表現している事が分かる。

③ ランゲ作曲 『花の歌』

譜例12

言定
 ・25歳ぐらいの女性
 ・最近人みなにもかまひなくいひない。月がきれいだな…星もきれいな…
 いかにに寒い季節

Flower Song

Lento moderato G. LANGE, Op. 39.

私の人生も月や星の如くに
光輝いていたらしいのにな

中間のあらすじ

彼女はだんだん眠たくなっていく。せめて夢だけはいい夢を見られますようにと願い、不安を抱えながらも眠りに付く。そして夢の中…さまよいながら、何の目的も無く森林に向かって歩いている。そしてさらに奥へと進んでいく。「どうしよう…抜け出せなくなって怖い」そしてとうとう帰り道が分からなくなって見失ってしまう。それでも歩いているうちに何かが見えてきた。光だ。何かが輝いている！何か気になって光っている方に向かって走る。そこに見えたものは？…

譜例13

神秘的な景気
きれい！
きれいだけど力強い！

con anima

音楽的特徴…右手はオクターブで開放的なメロディー。左手は低音オクターブの上に和音の連打。
着色の方法…夢で森の中で見失った後に目にした神秘的な景色を、右手は幸福感や安らぎを与える緑色、左手は桃色、水色、黄緑色の淡い3色を混ぜ合わせて神秘的なイメージを表現している。

譜例14

音楽的特徴…メロディーはクレッシェンドを繰り返して高音へ向かう。和音が3拍毎に変化する。
着色の方法…和音がどんどん変化してメロディーが盛り上って行く様子を、色とりどりの美しい花が次々と咲いている様子に例えている。和音の変化を色彩の変化と結び付けている。

譜例15

目から自然の涙がこぼれ
[こぼれ]

rit. dim.

音楽の特徴…右手はアルペジオの下行形でハーブの様な響き。和音はへ長調の主和音が続く。
 着色の方法…目標に向かって走り続けたいという強い気持ちと充実感を青色、紫色、赤色、橙色などで着色している。アルペジオの部分は美しい大きな虹の様に表現している。

譜例20



音楽的特徴…アルペジオの上行形でフレーズを終えて、静かに属和音から主和音に解決している。
 着色の方法…明るい生き生きとした気持ちを橙色、黄色で着色している。意気込みや夢を赤いハートの形で描き、その気持ちを大切に両手で抱えている様子が描かれている。

以上から、学生は楽曲の音の高低の変化を主人公の感情の起伏に例えて、その変化をイメージに合う色で着色している。曲全体は大きく分けると3つの部分から構成されていて、その場面の変化をはっきりと捉えて物語を構成している。色を混ぜたり濃淡を付けたりして、主人公の細かい心情の変化を表現しようとしている事が見受けられる。発表会終了時の質問紙の自由記述によると学生は「絵を描く事でより表現しやすくなった」「イメージすると楽しい」と述べている。主人公を設定する事によって、より物語を身近に感じて情景を思い浮かべたり感情を込めて演奏する事が出来る様になったと考えられる。

④ 絵図1 ランゲ作曲『花の歌』のイメージ画



曲全体のイメージをひとつの絵の中で描いている。左から右へ時間が流れているのに着目して、以下の物語の流れと照らし合わせて見ていただきたい。

- ① 主人公の女性が夜空を見上げてうまくいかない人生に不安を抱えている。
- ② やがて眠りにつき夢の中で真っ暗な森林をさまよひ、見失ってしまう。
- ③ 光が見えて神秘的な景色に出会う。色とりどりの花が咲いている。
- ④ きれいで力強い景色に心を打たれて、自然と涙がこぼれる。
- ⑤ 目覚めて現実の世界へ戻り夢だったと気が付く。
- ⑥ 自分を見失っても目標に向かって走り続けたら、必ず達成でき不安は無くなる。
- ⑦ さあ支度しよう！一日が始まる！

以上から、イメージ画を描く事によって楽曲全体の構成が頭の中で綺麗に整理されて、より明確に表現したい場面が頭に浮かび上がる。このイメージ画を見ると、夜空を描き落ち着いた雰囲気の中で始まって、怪しげな森でさまよひ色とりどりの花畑をくぐり抜ける。涙を流した後は虹を超えて希望に満ちた未来へと向かって行く。学生がこの絵を描く事でどこがクライマックスでどんな色合いで演奏するべきなのかを改めて考える機会となった。発表会終了時の質問紙の自由記述によると学生は「イメージ画を描いたら表現し易くなった」と述べている。続いて質問紙による学生の思考の変化について結果をまとめたものを記す。なおこの結果は学習開始前、5、10、15回目の授業内発表会後の合計4回に渡って行った質問紙による調査時に、全て出席している学生10人を対象としたものである。

2 音楽的特徴に対する思考の変化

表1 学習による音楽的な特徴（イメージ）に対する思考の変化

意識した事	具体的な視点	意識した人数			
		学習開始前	5回目	10回目	15回目
イメージ	1 雰囲気	6	10	9	10
	2 構成	2	7	8	9
	3 場面の变化	5	8	6	8
	4 音楽の方向性	4	6	8	10
	5 クライマックス	6	7	9	6
	6 強調する部分	7	9	9	8
合計		30	47	49	51

表1から、雰囲気、強調する部分、構成については、「楽曲イメージ奏法」を始めてから早い段階で多くの学生が意識をしている。また、音楽の方向性については学習を重ねていくうちに意識が高まっている。構成については学習前に2人しか意識できなかったが15回目の発表会が終わる頃には9人の学生が意識できるようになっている。全体の合計を比較すると、早い段階でイメージに対する意識が高まっている。

表2 学習による音楽的な特徴（表現）に対する思考の変化

意識した事	具体的な視点	意識した人数			
		学習開始前	5回目	10回目	15回目
表現	1 強弱	8	9	10	10
	2 速度	6	7	9	9
	3 メロディー	9	8	10	9
	4 曲想	6	7	10	9
	5 色彩	1	7	6	8
	6 音色	4	8	10	8
	7 響き	4	6	7	7
合計		38	52	62	60

表2から、強弱、メロディーについては学習開始前から多くの学生が積極的に意識しており、また曲想、響きについては学習を重ねる事で意識ができる様になっている。そして「楽曲イメージ奏法」を学ぶ上で特に期待したい項目である色彩、音色については学習開始前と比較すると、半数以上の学生が意識して表現する様になった事が分かった。全体の合計を比較すると表1のイメージと同じく、学習を始めて早い段階で表現に対する意識が高まっている事が分かる。

表3 学習による音楽的な特徴（奏法）に対する思考の変化

意識した事	具体的な視点	意識した人数			
		学習開始前	5回目	10回目	15回目
奏法・技能	1 身体の使い方	2	5	3	6
	2 拍子感	6	6	8	8
	3 フレーズ	5	8	5	7
	4 レガート	3	7	3	6
	5 アクセント	7	8	8	9
	6 伴奏の効果	3	4	2	6
	7 集中	7	8	9	10
合計		33	46	38	52

表3からフレーズ、伴奏の効果、身体の使い方については10回目の発表会においてあまり多くの学生が意識できなかったことが分かる。これは表2と比較すると曲想や音色を表現する事を意識できた反面、具体的な奏法を日々の練習やレッスンで身につける事ができたとは言いがたい。その一方で拍子感、アクセント、集中においては、日々の学習やレッスンの積み重ねにより、徐々に意識が深まっている。

V 「楽曲イメージ奏法」の効果に関する考察

1 楽曲のイメージが豊かになる

表1からも分かる様にイメージに対する意識は全体的に、比較的早い段階で高まっており、これは楽曲にオリジナルの物語を考えて楽譜に着色する行為によって音と色が頭の中で直接結び付いて、演奏する際のイメージを豊かにする効果があると言える。井上が述べたようにテクニックではなくイメージが先行した演奏を目指す事が大切であり、曲全体の大きなプランと部分部分の構造を持つ事によってより良い演奏が生まれる。

三雲、小谷は管楽器の音色の色彩的イメージについて「音の高さと色との対応関係については、高音になるにつれて明るい色になり、低音になるにつれて暗い色になるという関係がほぼ成立するようである [10]」と解説している。譜例12、17に見られる様に音域が低めで静かな部分は藍色や混色の落ち着いた色合いで着色しており、譜例14、15、19の様に音域が高くなるに連れて徐々に明るくカラフルな色で着色している事が分かる。学生は音の高さと音楽の盛り上がりを結びつけて感じ取り、それを表現しているのである。今回の「楽曲イメージ奏法」の実践で学生は、発表会後の質問紙の自由記述によると「前までは何も考えずに、ただ弾いていただけだったけど、考えながら弾くようになった」「全ての曲を初めて弾くときでもイメージが出来る様になった」「自然に指がメロディーを覚えてくれる様になった」「イメージして演奏したら楽しかった」と述べており、自分自身で物語を創造してそれを楽しみながら表現する体験は、表現豊かなピアノ演奏を目指す上で、大きな効果を発揮した。物語を考える事はそれだけでどんな音で弾きたいのか、どんな事を表現したいのかを考えながら演奏する事に繋がって、表現意欲を向上させたのである。またそれは登場人物を決めて物語に起承転結を付ける事によって、音楽の方向性やどんな雰囲気演奏したいのかという事が明確になった結果ではないだろうか。

2 音楽的な表現意欲の向上

「楽曲イメージ奏法」を実践して一番効果を感じたのは、学生の音楽的な表現意欲が大きく向上した事である。そして学生が創造する物語は感性豊かでユーモアのある作品が多く、中にはとても感動的で涙を誘うものもあった。彼らは音楽的特徴をよく捉えた上で自分のイメージを持って楽譜に着色している。

表2の強弱、速度、メロディー、曲想については「楽曲イメージ奏法」に取り組む以前から授業内のレッスンにおいて、触れる機会が頻繁にある内容ではあるが、楽曲のイメージをより深める事によって楽曲を自分なりに表現する意欲が高まった為に、ほとんどの学生が意識するようになったと言える。今回の実践によって奏法の細かい指導まで至らなかったが、学生は全3回のクラス内発表会を経て音楽的表現において大きな成長を遂げており、楽曲の方向性や雰囲気、強弱などをよく意識して集中して演奏に取り組む事が出来る様になった。物語を創造する事による利点は、この行為自体が楽曲の曲想、調性、テンポなどあらゆる音楽的特徴を総合的に理解する必要性を迫られるので、必然的に楽曲について考えて分析をして理解する力が身に付く事である。

学生が描いたイメージ楽譜から考察すると、まず楽曲に物語を付ける事によって楽譜と向き合う時間が増えて楽曲に対する意識が深まり、それが表現する意欲へ繋がったと考えられる。

古市、玉井は身体表現と伴奏音楽の関係をみて「従来の演奏技術や演奏者の心の在り方ではなく、動きと音楽の視覚的な類似を示す方法を用いた。作曲した伴奏音楽を二次元的に表す楽譜図を作り、その模式化を行い、それが動きの軌跡と同じような形になることをみだした [11]」と述べているが、その方法と同じく今回は「楽曲イメージ奏法」によって学生の頭の中でイメージして創造された世界観が、図式化またはイラスト化される事によって、表現豊かな演奏に自然と繋がっていると言えるのではないだろうか。

3 視覚的な楽曲分析の効果

楽曲の物語のイメージを着色する事を通していろいろな場面や風景、心情を心に浮かべながらピアノを演奏する事が可能になった。学生は質問紙の自由記述において「イメージ画を描いたら表現しやすくなった」と言っているがなぜ彼らは表現しやすくなったのか。バーンスタイン、Sは「音楽作品に惹かれる最初の自然な気持ちこそ、学習を促すもっとも良い刺激である。しかし、芸術体験を持続させるのに役立つ完全な習熟に至るには、それだけでは不十分である。あるがままの自然な気持ち一漠然とした想像力の動き一を、補足された完全な愛情に変えなければならない [12]」と説いている。学生が楽曲に対して感じた自然な気持ちを大切に、自分なりの解釈で物語を創作してそれに自分でイメージした色で着色をして楽曲に対する愛情を育てた事が、より表現豊かな演奏へと導いたのである。

学生が着色する際に譜例13、17、18の様に3、4色の色鉛筆を混ぜて表現している部分が他にも多く見られた。アルシュエラ、ハトリックは混色する子どもたちについて「ひとつの集団としてみると、色を離して置く子どもたちよりも感情表現がより自由であり、またいつも色を重ねてしまう子どもたちよりも社交性に富んでいることが分かった [13]」と観察している。子どもと成人では多少表現方法に違いがあると思われるが、学生がたくさんの色を混ぜて表現している部分は、単色で着色している部分に比べて感情を自由に、そしてより強く表現しようとしているのではないだろうか。須藤、杵鞭は「人間が音に対する経験と知識が豊富であり…ほとんどの音は視覚的情景や現象と対になって記憶されている。それゆえほとんどの成人において、音を聞いたときに引き起こされる感性は音と関連した視覚的知識と関連して起こる [14]」と説明しており、人間にとってイメージと音の結びつきがとても強いものである事を示している。学生が譜例5の最後に花を描き、譜例11の最後に拍手や紙吹雪を描く事によってその曲のフィナーレを華やかに表現しようと試みている事や、譜例15にカラフルな水玉模様を描き、譜例20の最後に大きなハートを描く事によって、その部分を幸せな気持ちで表現したい、または大切にしたいという気持ちの表れであると読み取る事が出来るのではないだろうか。

また強弱を色の濃淡で表現する事によって、楽曲の盛り上がりをより意識して表現出来るようになり、曲のクライマックスがどこにあるのかを視覚的にも理解し易くなった。梅本は表現に影

響する音楽の諸要素について「音の強弱の変化は表現の重要な次元であるが、楽器によってその重みは異なる。ピアノではとくに重要である（[10] のp. 30.）」と述べている様に、ピアノ演奏で特に意識すべき音楽的要素である強弱を、多くの学生が意識出来た事はとても効果的であった。また全体的にフレーズ毎にそれぞれ違う色合いで着色している場合が多く、それによって単調な表現ではなく場面の移り変わりやフレーズ感を大切に、変化に富んだ演奏を意識する様になり、学生自身が考える音楽の流れを大切に表現をする事に繋がった。

『花の歌』のイメージ画では曲全体のイメージを一枚の絵に描いているが、この絵は時間が左から右へと流れている事が分かる。古市、西崎は、「藤本朝巳はその著『絵本のしくみ』において絵の流れを図で説明し、読者の目は左から右へ行くことが自然であることを色々な絵本を使って説明している [15]」と示している。楽譜も同じ様に左から右へと音楽が進行しており、繰り返し記号が無い限り、楽譜を左向きに読む事は無い。学生は自然に感じたままに時間の流れを左から右へ設定しており、最後は不安も無くなり未来へ向かって行こうとする主人公の気持ちを、右肩上がりに進んで行く道に例えて描いている。

楽譜上では白黒で描かれている音楽が、学生自身の経験や創造力によって色鮮やかに生まれ変わり、それをイメージしながら演奏する事は学生にとって、楽しく興味のある体験であった。その為クラス内発表会ではそれぞれがお互いに楽曲に対してどんなイメージをもって表現しようとしているのか、とても興味を持って聴き評価し合っている姿が見受けられた。これは「楽曲イメージ奏法」の取り組みをしていなかった前期のクラス内発表会と比較すると大きな意識の違いがあったと言える。これらの事から「楽曲イメージ奏法」の実践により学生はピアノ演奏における楽曲のイメージ・表現意欲・楽曲分析をする上で大きな成長を遂げたのではないだろうか。

保育者に求められる音楽的資質について三森は「遊びの中で幼児が表現活動をしている時に、どこまで気づき心のやりとりを展開できるかがその後の成長の分かれ道となる。特に音楽については、日常の園での生活や遊びが音楽的な活動に発展し、心の底から楽しみながら展開する活動が音楽活動につながる事が理想である [16]」と述べている。様々な動物が登場する楽しい物語や、自分を主人公にした現実的な物語など、テーマを自分なりに自由に考えて、それをイメージして演奏する事を楽しんだという経験は、彼らの今後の音楽表現活動に大きな影響を与えるであろうと考えられる。

VI おわりに

今回の「楽曲イメージ奏法」の実践により保育士養成校である本学の学生はピアノ演奏において、楽曲のイメージ・表現意欲の向上・楽曲分析をする上で大きな成長を遂げたのではないだろうか。本来保育者を目指す学生にとってピアノ演奏や表現活動は、苦しいものではなく楽しいものであるべきである。筆者は今後も楽曲のイメージがより豊かになり表現する意欲が高まって、視覚的にも楽曲分析が楽しく出来る「楽曲イメージ奏法」について、さらに研究していきたい。

引用・参考文献

- [1] 奥千絵子『ピアノと向き合う』春秋社、2010年、p. 9.
- [2] 山岸麗子『あたまで弾くピアノ 心を表現する手段』音楽の友社、2009年、pp. 30-31.
- [3] 雁部一浩『ピアノの知識と演奏』音楽之友社、2009年、p. 57.
- [4] 井上直幸『ピアノ奏法』春秋社、1998年、pp. 14-15.
- [5] 中田京子『先生と生徒のための 楽曲イメージ奏法』ドレミ楽譜出版社、1995年、p. 5. (本文中の武本京子と著者の中田京子は同じ人物である。)
- [6] クッチュリー, M.、ヘンスン, R. 編/柘植秀臣、梅本堯夫、桜林仁監訳『音楽と脳』サイエンス社、1983年、p. 295.
- [7] 古市久子『保育者養成のためのテキスト 身体表現』北大路書房、2004年、p. 176.
- [8] 夏目佳子「曲想表現を豊かにする子どものためのイメージ演奏法の検討ードビュッシーのピアノ曲『子供の領分』より「象の子守歌」からの検討」岡崎女子短期大学紀要、2005年、p. 118.
- [9] 加藤晴子、伊達優子「自ら思考するピアノ表現学習における学生の意識の変容」岐阜聖徳学園大学紀要、教育学部編、2009年、p. 101.
- [10] 梅本堯夫編『音楽心理学の研究』ナカニシヤ出版、1996年、p. 187.
- [11] 古市久子、玉井明「身体表現とその伴奏音楽の関係についての新しいアプローチ」幼児教育学研究第15号、1995年、p. 11.
- [12] バーンスタイン, S / 佐藤覚、大津陽子訳『音楽による自己発見 心で弾くピアノ』音楽之友社、1999年、p. 217.
- [13] アルシュエラ、ハトウィック『子どもの絵と性格』文化書房博文社、2002年、pp. 96-97.
- [14] 須藤貢明、杵鞭広美『音楽表現の科学』株式会社アルテスパブリッシング社、2010年、p. 26.
- [15] 古市久子、西崎有多子『絵本の翻訳に何が影響しているか～日英の絵本を通して～』東邦学誌第38巻第一号、2009年、p. 37.
- [16] 三森桂子「保育者に求められる音楽的資質について」日本保育学会大会研究論文集、2011年、p. 639.

受理日 平成24年 3 月30日